「日々の理科」(第 1145 号)　2017 (H29),-8,25

「北極圏旅行記 2017 夏（29)」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

～8/1　アビスコからビッタンギへ～

スウェーデン最北部のアビスコは、北極圏に位置し、世界有数のオーロラ好観望地として有名だ。最近は、日本からのオーロラ観望に特化したツアーも組まれている。

上写真は、2001 年 1 月にアビスコで撮影したオーロラ写真である。まだデジタル一眼レフが珍しい時代で、フィルムカメラを主体に撮影したが、この写真は私がはじめてデジタル一眼レフで撮影したオーロラである。

氷点下 30℃と非常に寒く、トーネ湖は完全に凍結していたので、氷の上に三脚を立てて撮影した。時々、氷の下からドーンという振動があり驚いたが、これは、湖面と氷の間に隙間があり、超周期の湖の波（静振）が、氷にぶつかる時のものだった。

これは、2003 年の夏に撮影した、上のオーロラ写真と同じ場所の「ボートハウス」である。この写真を撮った時は、ボートハウスの持ち主と話をして、「将来譲ってください」と交渉までしたものだ。そんな思いがあるので、今回ももう一度このボートハウスを見るのを楽しみにしていた。

しかしボートハウスはすでになくなっていた。桟橋の土台の材木だけが残っていた。ちょっとさみしい気分になってしまった。

今日は、まずビッタンギ村に向かう。あいにく雨のドライブになってしまった。

ビッタンギ（Vittangi）は、北緯 67° 40'の北極圏に位置する。人口 800 人あまりの小さな村で、この村にも思い出がある。

2013 年にこの村はずれのバンガローに宿泊したのだが、そのキャンプ場のホームページの地図が実に不適切で、ぜんぜんちがう村に行ってしまった。村の女性に聞くと「ビッタンギの中心地の近くですよ」と教えてくれたが、戻ってもみつからない。レストランの裏の川沿いをウロウロしていると、お店のお兄さんが非常に親切に場所を教えてくれた。

これがそのレストラン。ピザとイタリア料理の専門店だ。今回も、このレストランで昼食をとるのを楽しみにしていた。

残念ながら、４年の間に経営者が３回も変わっていて、あの親切なお兄さんはもういなかった。しかし、メニューや内装は当時と変わらず、すばらしいランチを楽しめた。奥が「ミックス・ピザ。手前は私が注文した「ランチ・セット」。カツレツに大量のポテトと野菜、サラダとクラッカーは食べ放題、それにソフトドリンク付きで、70 クローネ（約 900 円）とお値打ち。これには、消費税（25%）が含まれている。ノルウェーやフィンランドでランチを外食にすると、大抵 2000 円以上かかる。やはりスウェーデンは、北欧の中では、かなり物価が低いと感じる。

ビッタンギは、西部劇のロケにでも使えそうな、ひなびた村だ。鉄道も空港もない。

今夜はビッタンギ村から数十 km 先の貸別荘に泊まる。スーパーもないような小さな村なので、ここで買い物をすることにした。

食材は豊富だが、肉類よりも野菜のほうが高い。輸入なので仕方ない。スウェーデンでは、スーパーではライトビールしか買えないのも、ちょっと不便だ。